

【2013年6月29日 基調講演】

震災復興と大学の使命

坂田 隆
(石巻専修大学)

ご紹介いただきました坂田です。

今日お時間多くいただきまして、最後に質問の時間を15分～20分取れればと思っております。人の緊張というのはたかだか50分しか続かないということになっておりまして、12時までは続かないわけですから、結論を先に申し上げます。

大学の使命

大学の使命ということですが、私たちの大学のような私学では、大学それぞれ全部使命は違うと思います。私たちの大学というのは、これは平たい言葉で言えば社会の役割ごとを担う人をつくるということかと思えます。教育です。よく国などは教育・研究・社会貢献を求めています。私たちは研究も、もちろんいたします。負けるつもりはありませんけれども、それは、教育の質を上げるためのものだと思っています。社会貢献もいたします。それは、学生諸君の将来がよくなるからであると、私たちは考えています。というのは、私たちの大学の運営費の現在は75%くらいですけれども、多い時には80%ぐらいは学生諸君からの納付金で活動しているわけです。

ですから、そのお金で社会貢献をするというのは、場合によっては背任なのかもしれません。結果、今の、あるいは将来の学生諸君に貢献することがなければ、してはいけないだろうと思っています。

私たちの大学の使命は社会の屋台骨を担う人をつくることです。誰が見ていなくてもちゃんと働く。汗を流して働いて、食べていける人をつくる

のが、学校法人専修大学全体の考えであります。ですから地味であります。

さて、今回の震災以来、新しい使命ができてしまったような気がしています。一つは、私たちの大学は、被災地のど真ん中にあります。したがって、我々も被災者であるわけですがけれども、町の人と一緒に立ち上がってゆく。一緒にということ。上からの助言とか指導ではなく、一緒に立ち上がってゆくということがあります。

もう一つは、大学は通常、研究をしたり、調査をするという側ですが、我々のような被災地にあるという立場に立った大学というのは、それほど多くはないわけですから、研究をされる側、調査をされる側にもまわるということです。これは、震災直後の学部長会で決めました。内部的にはモルモット宣言と言ってますけれども、我々がモルモットになるということです。

もう一つは、マスコミにはできない広報活動をしようということです。マスコミというのは、いけないところを指摘するというのが大事な役目です。良いところをニュースにしても、ニュースにはならないというところがあります。しかし、今回の震災対応は、結果として、私はかなりよかったと思っています。点数をつけると70点とか、80点。もうちょっと高いかもしれません。震災のとき私は札幌にいて、ワンセグで津波の動画を見たわけですがけれども、直感的に死者3万人というのが、頭に浮かびました。

実数は、約2万人です。それは、二次被害が少なかったからです。津波で流されて亡くなった人が多くいらっしやるわけですがけれども、当日の夜以降に亡くなった方は想定よりも、かなり少な

かったと私は思っています。そういうところのどこがよかったのかというところを、きちんと見出して、それを発言するというのは、大学の使命だろうかと思っています。

今からお話しすることの具体的な流れはすでに刷り物でお渡ししておりますので、私たちがどう考えていたのかということを中心に話したいと思います。

東日本大震災当日とその後の対応

私たちの大学は平成元年に石巻市に創立されました。建学の精神は「社会に対する報恩奉仕」といいます。地元の強い誘致を受けてできました。地元では、町を2分する論争がありました。それはなぜかという、つくる場合には、約100億円の支出をする必要があったからです。土地を造成してもらって、全部いただきました。その借りがあるということを教職員は忘れておりません。実際には、100億円いただいたんですけれども、経済効果を考えると地元は3年で取り戻したといわれています。取り戻したといわれていますが、しかし、安価ではありません。それは忘れておりません。震災当時は、理工学部と経営学部、入学定員440人のちっちゃい大学です。しかし、敷地はとても広くて42万平米です。東京ドームの9倍といわれています。これは、大きな意味を持ちました。駐車場860台。無制限の対人保険に加入している学生はみんな自動車に乗ってきていいんだということになってます。これも大きな意味を持ちました。

もう一つは、地元から創立以降も支えられていまして、平成19年度から、かなりの額の寄付金を石巻市からいただいております。また、現在の亀山石巻市長は、私たちの大学の元教員でございます。それも、ある意味では幸運になっていますね。

津波の当日、私は不在でしたが、理工学部長と学生部長等が学内におりまして、被災者はみんな避難してやってくるから、そのときにどうするかということになったわけなんです。そのときに2

人が口をそろえて言ったのは、日頃から社会に対する報恩奉仕と言っているのに、「帰れ」とは口が裂けても言えないということです。私はそれまで、建学の精神に実効があるとは思っていませんでしたが、そのとき初めてわかりました。役に立ちました。

建学の精神はさておき、学生さんに入学式で「初めて出会うときにも、適切に対処できる能力」を本学で身につけてほしいと言っています。知識とか、記憶というのはありません。こちらの学会の方は、おそらく真面目な方が多いので、学校で教わったことをかなり覚えていてくださると思うんです。私は非常に不良な学生でありまして、今の大学に入ったとき、学部長が「君の学生時代のことは、学生に言うな、参考にならない」とおっしゃったほどです。教わったことは、ほとんど忘れられました。そういうものだと思います。大学教育というものは、ほとんど忘れるものだと思います。それでも、大学に行った人は違ってはいけなくて、ここが違わなくてはいけなくて、私は思っています。前例がないとか、教わったことがないという言い訳はしないということです。

私ども教職員は、津波に遭遇して、避難所というのを初めて運営したわけですが、そこそこうまくやってくれたと思います。ですから、彼らは「初めて出会うことに適切に対処できた」ことになります。

皆さん地元の方はよくご存知なんですけれども、石巻市、それからその南にある東松島市、北の女川町をあわせて石巻圏域と申します。この3つの自治体というのは、それぞれ今回の東日本大震災の被災地の中で一番ひどい被害をうけた自治体です。石巻市は、亡くなった方の数、それから壊れた家の数は、全自治体の中でだんごの一番です。およそ4,000の方が亡くなりました。全体で約2万人の方が亡くなったわけですから、20%です。東松島市と石巻市は約2.4~2.7%の方が、女川町ではなんと9.5%の方が亡くなっているということです。10人に1人です。被災の年の3月末に女川町にうかがったんですけれども、よく9割の方がこれで生き残ったもののだとい

う考えを得ました。町の中は真っ平で、車が水の中どころがされて球形になっていました。

また、平成の大合併で、石巻市は後背地も、農村地も合併したので、震災のとき、浸水区域は13%となっていますが、旧市街のかなりの部分は浸水をしています。東松島市は山のほうも含めて、3分の1が浸水しました。女川町は4.5%で少ないように見えますけれども、男鹿半島の付け根で、平地がほとんどないところです。ですから、平地はほとんど水につかったという意味です。住家被害はどうなったかということなのですが、やはり女川町というのは、ものすごい被害を受けていて、被災家屋のほとんどが全壊なんです。ちなみに石巻市の被災個数は5万3,000戸ですけども、これは全住居の87%という意味です。ですから、ほとんどの家がなんらかの被害を受けていた、ということです。

石巻市の旧市街地の中心地は基本的に全部浸水したわけです。市役所、駅、学生諸君が住んでいるアパートのある地域は床上浸水です。大学は、市街地の北、旧北上川の内側にあります。が、幸いにも大学には、津波は入ってきませんでした。

学生の安否を確定するのは困難を極めました。携帯を持って逃げられなかった、携帯の充電が切れている。どこの避難所に行っているかわからない。ということがあり、確定したのが、3月の30日です。あらゆることをやりました。教員の中には避難所を一軒一軒回って、ゼミの学生全部を確認したという人もいました。

留学生が多く来てまして、非常に心配してたんですが、全員まとまって石巻の消防の庁舎に避難して大丈夫でした。これは当日中に職員が確認しました。残念ながら亡くなった学生もいます。仙台市内で兄弟の学生が二人、東松島の大曲で一人、女川で一人、塩竈で一人です。一方で、石巻市内に900名住んでいましたけれども、全員無事でした。石巻市の死亡率から考えると、それは幸いであつたということであろうと思います。

逆に言えば、大学生というのは、簡単には死なないということです。実は、亡くなった6人のうち、少なくとも3人が、体の不自由な家族、ある

いは親族を助けようとして亡くなったことがわかっています。足の悪いおばあちゃんを車で連れて逃げようと思ったけど、逃げられなかった。おじさんを連れて逃げようと思って、逃げられなかったというのがわかっております。立派な学生だったと思います。

被災した学生には、奨学金の枠を目一杯拡大して、額も目一杯拡大して、支給しました。授業料の全免、半免、これを2年間給付しました。おそらく東北地方の私学で一番手厚い支援をしたと思います。

ちなみに23年度、石巻専修大学だけで4億1,000万円です。あの年の総収入23億円ぐらいですから6分の1を奨学金で使いました。国から3分の2補助をいただきましたけれども、残りが法人の持ち出しです。最終的に石巻専修大学では昨年度末までで6億3,000万の学生支援をしています。学校法人専修大学の傘下でなければ、たぶん震災の年の7月ぐらいにキャッシュフローは止まっていたと思われます。

奨学金を支給した学生の数は642人です。私たちの学生、この頃は約1,800人いました。今、1,350人に減ったんですけれども、1,800人いました。ですから、3分の1の学生が、明らかな被災者になったということになります。では、教職員はどうだったかということなのですが、職員は全員学内に勤務してましたので無事でした。彼らの車も、大丈夫でした。教員の安否確認は学生以上に難しく、孤立してしまった教員が、何人かいました。けがをした者もありましたが、全員生命は無事でした。ただ、近親者を亡くした者が5人。若い職員で、一人ぼっちになってしまった者がいます。

教職員の家屋被害ですが、私学共済の見舞金の支給を受けた者が49人です。当時、130人ぐらいですから、3分の1くらいが被災をしている。ですから、私たちは、被災者を3分の1抱えた大学です。

校舎は非常に丈夫でございまして、いろいろ補助金をもらう関係で必死になって被害を探すわけですが、被害は少なかったです。液状化も

ほとんど起こりませんでした。5号館という一番新しい建物のふき抜けのところが外装がひび割れた。あとは、体育館の空調のダクトが抜けてしまったとかということですが、授業を当日やれと言われれば、当日からでもできた状態です。

一方で、大学には理工学部がありますが、実験室がありまして、実験室には天井を張っていませんでした。これは空調とか、配管などのメンテナンスを楽にしたいということで張ってなかったんですが、当然、天井は落下しなくて、機器の損傷を防げました。電気につきましては、停電したのですが、自家発電機が3系統あります。別の棟に3系統あって、合計でカタログ出力140kwぐらいですね。

管理会社が緊急工事をしてくれまして、この3系統を全部つないでしまっていて、どれかダウンしてもなんとか明かりは消えないことになりました。ですから、被災者の入られていた4号館という建物、それから教職員が宿泊していた本館という建物。この2つについては、電気はずっと灯っていました。携帯の充電もできました。在庫のある限りは自販機も使えました。ですから、被災した方が暖かいコーヒーも飲めたと思います。これは、決定的に重要だったようです。

当日、私は札幌で大腸関連の国際セミナーに出ていました。その途中でスクリーンが幅1mぐらいで揺れ始めて、一瞬、何かわかりませんでした。

私は、実験系の科学者なんですが、実はずっと訓練を受けてることがありました。頭の中では驚いてるんですが、それを顔に出さないという訓練をしています。ワンセグで津波の映像なんかを見ていまして落ち着いていると言われましたが、どうしようもないものはどうしようもないんですね。冷たいんですけど、札幌からは何もできませんでした。

午後4時ぐらいに奇跡的に電話がつながりまして、事務部長から「学内は死傷者なし、重大な損傷なし。被災者が来たら入れていいですね」という内容でした。私は「入ってもらって下さい。そちらの決定は全て私の決定として追認します」と答えました。あとで、理事長に許可を誰か取っ

たかということになりましたが、誰も、避難所をやるということの許可は取っていないということが判明しました。私学というのは、そんなことを何うような組織ではないと考えています。現場で判断してやるのです。

これは大反省なんですけど、火事と地震のマニュアルはありました。津波のマニュアルは、恥ずかしながらありませんでした。ですから、まず地震ということで、地震対応をしました。そうこうするうちに、ラジオで大津波警報が出たということ把握して、高いところに移動させました。

もう一つは、理工学部がありまして、可燃性のものですか、毒とか、刃物とか、爆発するものとかがあります。実は、耐震の実験室にはなっています。薬品が倒れない実験棚とか、危ないものはひっくり返らないように、ステンレスの耐震キャビネットに入ってます。毒は、金庫に入れて鍵かけます。ですから、大丈夫だとは思いますが、理工学部長が危ないところを全部回って、確認をして、危ないところを全部封鎖しました。そうしないと、被災者に入ってもらえないわけです。

いろんな大学のマニュアルを最近拝見するんですが、自分が加害者になるという視点は、ほとんどありません。自分が被害者になったときに、どうしていくかということだけです。でも、理工系の大学は、危険物がありますから自分が加害者になります。

そうこうするうちに、私の方では若干、様子が見えてきたのですが、学内では「周囲の状況はまるでわからなかった」と言っていました。石巻市内のことを全国ニュースで知るといって、情けない状況だったそうです。ですから、「大学から橋を渡って帰る。その橋が通れるのかどうかもわからなかった。その向こうがどうなってるかは、まるでわからなかった」と言っていました。

一応、午後5時に職員・教職員に「帰れる人は、帰っていい」という指示を出したんですが、ほとんど全員戻ってきてたんです。橋の向こう側が浸水して行けない。学生も帰れないということで、本館の会議室を開放して、学生を入れました。結局、1か月ぐらい暮らしていました。一般避難者

も来られたので、教室に入ってもらいました。

卒業式の準備をしております、体育館に入っていたけなかつたので、やむを得ず、実験室とか、そういうものがない建物の教室にはしから順番に入ってもらおうということになりました。

結果としては、教室のほうが、断熱性ははるかにいいですし、天井は低いですし、窓は大きいですし。私たちの大学は、窓は全部ペアガラスです。ですから、天気の良い昼間でしたら、あの当時でも寒くはなかつた。

実は、このころ空調の工事をするために、床を、全部ベニヤ板とビニールシートで覆っていました。ですから、断熱性はもうちょっと上がっていた状況です。そういうところに、入っていただきました。

反省をしていくと、体育館に入ってもらおうというのことに二つ利点がある。入れる側の都合だけなんです。管理がしやすい。もう一つは、体育館だけ目をつぶれば、授業を再開できるということです。ですが、入る側としては、決して望ましくはないと思います。

特に好評だったのが、階段教室でした。私が、大学に戻って早速見に行ったら、階段教室に人がいっぱいいてですね、なんてひどいことをするんだろうと思い、「こんな段々のところになんで入れるんだよ」と言ったら、「先生、ここ、評判いいんですよ」と言われてしまいました。階段教室のいすの下に潜ると、若干、人目が遮られるんですね。予測がつかなかつたことは、いっぱいありました。

備蓄食料はありました。私たちの大学に、育友会という、親御さんの会がありまして、そこらご寄付をいただくんですが、直前の3年間は、備蓄食料を買っていました。ですから、3年間買ったための食料がありました。

もう一つ、水ですが、ビルの上に水道水のタンクがあります。なんで知ってたのかわからないんですけど、合計120トンありますと、事務部長に報告した職員がいたそうです。事務部長は経理の専門家でありまして、1日2〜3lということから計算をして、「大丈夫だ」ということで、市民の方にも、同じように備蓄の水を配布したということ

であります。

帰ったときに、反省したんですけれども、学生食堂の在庫を使ってなかつたんですね。かなり在庫があつたんですが、最初の1週間は、それを使えばもうちょっといい待遇ができたと思うんで、それは反省です。現在は、学生食堂に、少し多めに在庫を取っていただくように、交渉中です。

さて、そんなことがありまして、石巻市内で、大きな建物で人が入れるところは、石巻日赤病院と、私たちの大学だけでした。日赤がすでにパンク状態でした。本当に駐車場まで人があふれてて、立つすき間がない状況だったそうです。ですから、そこには何もできない。そのため、私たちのところが避難者の方々を受け入れました。しかも、電気もあり、車も止められるという状態でした。

ということで、避難所は、当日から4月末まで。おそらく一般の方は、1,000名以上いらしたろうといわれています。実数は把握できません。各教室の入り口のところに名前を書いています。斜線を引いて消してあったり、あとで加わったり、携帯がありますから、あそこの避難所は温かいとか、あつちは食事が良いなどの情報が飛び交い、本当に半日単位で人が動きます。ですから、実数はわかりません。学生・教職員が約100名学内で暮らしていました。日赤があふれていますので、軽傷の人は学内でなんとかしようという救護所を要請されて、つくりました。これは、体育館を使っています。

それから自衛隊の人も全国から来てくれたんですが、車を止めるとか、テントを張るとかなくなつてしまいました。乾いている大地がなくて、そこは全部もうすでに先遣隊が占拠してたんですね。ですから、石巻市長から電話がかかってくるまで、お入りいただきました。

それから、グラウンドがあるんです。これがヘリポートになりました。そこは、宮城県警の臨時着陸場に指定されています。これまでも年に1〜2回、警察や自衛隊のヘリコプターで着陸訓練を毎年やっていました。

ボランティアセンターにつきましては、石巻市と連携協定を平成11年にしたんです。それに基

づいて、ボランティアセンターの設置を主旨とした、防災協定を結ぼうということになってきました。震災の年の3月30日、市長と私が署名するという手はずだったんですが、案文は、1月には完成していました。ですから、幻の防災計画だったんですけれども、「あれに基づいてやる」ということで、進みました。ですから、これはかなりスムーズにいきました。はなからここに入っていたかどうかということは決まっていたし、大学のルールは守っていただくということも決まっていました。

最初は、社会福祉協議会、これも被災してしまっただんですけれども、社会福祉協議会に事務室を貸すというぐらいで考えていたんですが、5号館が、ほとんど全部ボランティアセンターと化しておりました。グラウンドには、テント村ができて、あと、でっかい倉庫テントもできて、野球部の室内練習場は、倉庫になってしまいました。

それから石巻赤十字病院の看護専門学校がありまして、旧北上川の河口からすぐのところ建っていました。これは津波の直撃を受けまして、非常に危険な状態でありました。幸い、全員無事だったんですけれども、行き場所がないということで、本学で1年間授業をされました。これは学校同士ですから、口が裂けても反対できません。我々が逆の立場になったら、反射的に考えてしまいます。

石巻市には宮城県の合同庁舎があります。石巻は宮城県で2番目の大きな都市です。仙台とは人口が違うんですけど、2番目です。ですから、宮城県の出先機関があるんですが、これも駅のそばですから、浸水して地震被害もかなりひどかったようです。

庁舎の避難先は、部門ごとに分かれていたんですが、被災者になってみるとわかるんですけど、手続きがいろいろあるんですね。そうすると、1か所じゃないとたまらないということがありまして、お引き受けしました。これは、体育館を片づけて入ってもらいました。結局、320名。あと、プラス水産関係の職員が20名ぐらいです。

実は、宮城県から補助金は1銭ももらっておりません。ですから、義理はありません。我々は私学ですから、大学は私有財産ですが、宮城県からは、

要約すれば「場所を貸せ、金は払わない」という要請がありました。ちょっと反感を感じないわけではなかったんですが、それはそれとして、1か所にまとまらなければ被災者が不便だと思い、受け入れました。あとで使用料をいただきましたけど。

自衛隊のヘリで運ばれた方やトラック、バスで来られる方とか、牡鹿半島から5時間ぐらい歩いて来られた方もいたそうです。当日、翌日に来た人は、ずぶ濡れの人のがかなり多くて、ヘリはとにかく助けたいので、降ろすやいなや何も言わないで飛んでいってしまったそうです。ですから、来た人は、突如ヘリに乗せられて、10分か20分飛んで、なんだか知らないところに降ろされたんだそうです。

すると、学生・教職員が飛び出してって、担いで教室に入れました。理工系の学生は白衣を持ってらるんですね。大学に置いてたりします。それや、着替えを持ってきてくれて、着せてくれて、おそらくそれは返してないと思うんですね。お夜食なんかも提供してくれたんです。おそらく、これが今回の学生災害ボランティアの第1号だったかと思います。

これは救護所で、簡単なものですね。点滴ぐらいはできる。副木ぐらいは当てられるという感じです。一日に120人来られました。

私は、1週間前後しか見てないんですけど、ほかの避難所よりは、落ち着いてる感じはありました。かなり強い要求を出されている方がたまにはいたという話なんですが、殴り合いは起きてません。

どうも不公平なんですけども、「避難者の方が、大学の教職員の言うことはよく聞いてくださった」と、市の人が言っていました。小中学校の先生に対する態度と、大学の先生に対する態度は違っていたと言われています。

右下は仮設トイレです。石巻は真っ平らなところなんですね。中心部は真っ平らですから、下水というのは、ポンプで上げて、重力で流してというのを繰り返すのだそうです。ところが電力はありませんから、どんどんたまっていくんですね。

うちの大学では、あと一日下水の復旧が遅れたら大変なところでした。あふれるところでした。仮設トイレは、当日の夕方、事務職員に頭のいい人がいて、トイレが困るに違いないということに気がついて、出入りの土建業者から、自分でトラックを運転して、2台借りてくれました。やはりうちの職員も優秀だなと思うところがあります。残りは、石巻市で設置してくれます。

あと、水は当面あったんですけども、そのあと、全国各地からの給水車が来てくれました。私が大学に帰って給水の方と偶然話をする事ができて、必要量を伝えたところ、毎日給水してくれました。ですから、水では困りませんでした。

学生は男女を分けて教授会をやる階に収容しました。「学生ですから、自治をお願いします」「清掃とか、食べ物の分配とかは、君たちで考えてやってください」ということになりました。結構うまくやっていました。

これが、宮城県の人が入っていた体育館で、こうやって入って、このくらい、スペースでできちゃうんですね。県の合同庁舎は5階建てですから、そこに行くより、ユーザーにとっては快適で、手早く進みました。

印象的だったのは、5月ぐらいだと思うんですけど、石巻市の職員は真っ黒でした。本当に真っ黒になりました。外の活動が多かったんですね。県の事務所でも、児童相談所、福祉事務所、保健所の人は、真っ黒でした。この人たちはものすごく忙しかったんだろうと思います。

ボランティアセンターができたんですが、かなりうまくいったほうだと思います。震災の年の11月ぐらいまでで、おそらく50万人ぐらいの方が石巻に来られたといわれています。ボランティアセンターの登録者だけで、25万人ぐらいのようですが、ほかの自治体に比べると、ものすごく多い数です。3月中ですと、大体一日あたり、大学に泊まった人は、1,000人ぐらいです。これ以外に日替わりの人とか、自分たちでなんとかして来た人というのもありますから、多かったです。これは、組織がうまく機能したから。あるいは、ここに行けば、ボランティアができるということ

を早めに伝えられたからだそうです。早めというのは、14日ぐらいから始まって、17日、18日ぐらいには、かなり全国的に伝わっていました。これができるからだと思います。

それはなぜできたかという、一つは、大学と協定を結ぶことになっていて、双方の窓口が一つで、どうしたらいいかというのは決まっていたから、「細かな打ち合わせはなしで、お願いします」、「はい」ということで、スタートできたということです。

もう一つは、石巻市社会福祉協議会が担っていたわけですが、職員の方がそれほどいるわけではありません。最初は、自分たちでマッチングをしていました。被災者からニーズを聞いて、ボランティアさんが何ができるかを聞いて、組み合わせます。が、たちまちパンクしました。

3月17日からピースボートが来てました。その人たちに、マッチングなどの運営を含めて、お願いをしてしまったんですね。キャンプ村の体制とか、そういうことも全部お願いしています。そこで、社協の人たちが、自分たちの権限を手放したというのは、非常に勇気のある決断だったろうと思います。これは、尊敬すべきことです。

社協を代替でできるNPOの人が来ていてくれて、非常にいいムードに仕事を進めてくれたことも重要でした。

もう一つ、大事なことがあります。石巻災害復興支援協議会です。名称は変わりましたが、NPOを束ねるNPOとして、いろんなNPOをまとめて毎晩会議をする、そこに福祉協議会が来て、石巻市も来て。そういうことで、いろんな立場の人をまとめる仕事をしてくれました。これで、たとえば「子どもの支援が得意な人は、あそこに行ってください」というような有効な活動ができた。これが、「石巻モデル」といわれております。

復興支援協議会のキーパーソンがいて、私たちの大学の同窓会長です。1期生でして、石巻市長の選挙対策委員長になった方です。彼は市長にも話ができて、町の人とも話ができる。一方で、大学にもものは言います。そういう人がいたって

いうのも、非常に幸運でした。

そういうことを考えますと、こんなようなところが有利だったのかなと思います。一つは、安全な立地ですね。大学つくるときに津波のことは考えていませんでしたが、結果として、安全だった。建物は堅牢です。壊れてないんですよ。河岸のものすごく軟弱な地盤なんです。地元は、土地をくれるときに土壌の改良を真剣にやってくれたんだというのが、よくわかりました。ものすごくきちんとした工事だったんだらうというふうに思います。

裏に山があるんですけど、山の斜面から地下にもぐる岩盤まで基礎を打ってます。学生がいた建物は50m以上掘っています。被災者がいました建物は22mですか、基礎を打っています。ですから、非常に安心な建物であるということです。

あと、建物と建物のすき間が多かったというのは、決定的でした。すき間がないと、テント村はできないですね。すき間があるというのは重要でした。

駐車場が大きい。もう一つは、駐車場への通路が広くて、大型車両が入れるというのも重要でした。私たちが想定しなかったんですけども、ボランティアさんっていうのは、バスで来るんですね。乗用車ですと何人も乗れませんからバスに詰め込めるだけ積んで、水積んで、食べ物積んで来る。そうすると、バスが入れる駐車場がないと、ボランティアセンターはできない。トラックもたくさん来ます。それから支援物資が山のように来ますから、倉庫用のスペースも必要なんですけれどもあったと思います。

そして、私学ですから、物事を決めるのは簡単です。基本的に私の立場というのは、現場が決めたことを「はい」って言って、あとで理事会から叱られるときに出ていくというような仕事です。「ノー」と言う自由は、おそらくないんだと思います。ですから、決定は早くできました。

もう一つは、石巻の人に世話になったという職員間の共通理解があります。ですから、地元の人 came ときに、うつとうしいことを言う職員はいないと思います。

大学は、管理を東北総合サービスという会社にお願いをしています。これは、元地権者がつくった会社です。大学に土地を売ってくれた人たちです。ですから、愛着がありますし、近所に住んでいます。この人たちが自分たちで考えて、いろいろやってくれたのが大きかったです。

たとえば、発電機をつなぐというのは、実は、教職員ではそこまで考えられなかったようですが、その管理会社の人は、「こうつながないと困るよね」と言って、どこか電線を見つけてきたかわからないんですけども、全長で1kmぐらいの配線をしています。

それから、冬の終わりだったので、重油の備蓄はいっぱいありました。この発電機は軽油のディーゼルですが、なぜか重油を混ぜて動くということを知っている管理会社の職員がいました。その際には、燃料フィルターをしょっちゅう替えないといけないんだそうですが、燃料フィルターも大量に持っていました。それも非常に幸運だったんです。

学校法人の本部は東京にあります。そのために普段は不便です。私は学校法人の理事でもありませんから、毎週東京に出勤してるんですね。なんですけれども、これがなければ、おそらく、たとえば文部科学省のやり取りとか、いろいろできなかったと思います。安否確認も、当初は専修大学のホームページを通じて、やっていました。

反省はいっぱいありまして、軽油をもうちょっと持っておくべきだったということと、自然エネルギーの発電が、10kwでいいからほしいと思いました。今は、東京エレクトロンからいただいてソーラーパネルを設置しています。あと、風車もいくつか持ってます。

自立した上下水道。特に下水道がほしかったです。上水道は、理科系ですから、いざとなったら浄水プラントを自分たちでつくろうかということは考えていました。ろ過型の浄水装置であれば、自力でつくれます。もう一つは、塩素を持ってますから、いざとなったら実質的には水道法に合致する水を供給できる自信はありました。

下水はどうしようもなかったです。もともとは

浄化槽があったんですが、下水が通ったときに、浄化槽をつぶしてしまってたんですね。これは大反省です。今、東京の専修大学で新しい棟を建ててるんですが、そこの地下には、浄化槽ではないんですが、汚水の大型のタンクをつくりました。数日間、それでしのげるということです。

データに関しては、安否確認をするデータはサーバーに入っていました。ですが、サーバーは電圧が不安定なので立ち上げられませんでした。紙媒体のものを持ってなかったのですね。今にしてみれば、同じものを東京に置いておけば、そちらで出力をして、安否確認はできた。大反省です。安否確認をする協定を結ぶとしても、それだけじゃだめですね。たとえば神田校舎から石巻に電話をかけて、うまくつながらなかつたら自動的に安否確認を始めるという、頼まれなくても始めるという体制じゃないと、たぶん駄目なんだと思います。緊急時に安否確認を代わりにやってあげるかどうかという判断ができるほどの通信はできないんですね。

さて、大学業務なんですけども、学位授与式を3月20日に予定していましたが、とてもじゃないけどできない。大学に来る手段がなかったんですね。私は本館3階の学長室に暮らしていましたが、避難している学生のいる2階に降りていって、「卒業する人、何人いる？」とかいうと、わーっと、手挙げてるんですね。そうすると、15人ぐらいいました。「式やりたいか」って聞いたら、「そりゃ、やっぱやりたいよね」とかっていうんですね。事務の若者たちが力を出してくれまして、長机を1階のロビーに並べて、白い布をかけて、それらしくして。幸い、私も、理工学部長も、礼服は自宅の2階に置いてありましたので、とりにいって、式をやりました。

卒業証書は普通は、卒業生代表一人だけに渡すんですけども、全員に全文を読んで渡しました。学生は、やはり成長するものでありまして、私と握手すると「先生、頑張ってるね」とか、「体に気をつけてください」と言ってくれるんですね。私のキャリアで、一番印象的な学位授与だったと思います。

ロコミとか、マスコミを通じて伝えるわけですけども、どうも学校へ行くと、学位をもらえるというのが伝わって、6月ぐらいまでほぼ毎日、1人か2人ずつ渡していました。

入学試験は修羅場でありました。仙台と石巻で、一般入試をやる予定だったんですが、仙台会場は崩壊して使えない。石巻は使えるんですけど、来られないということで、書類選考にしました。センター入試は、先ほど言いましたように、専修大学経由でやりました。

郵便局もやられていまして、どのくらい郵便が届いたのか、届かないのか、全くわかりませんでした。4月までわからなかったです。ということで、志願票が届いてない人がいる。届いた人に受験票を送ったんですが、それが届いてない可能性のほうも大きいです。ということで4月にもう一回やりまして、疑っても仕方がないので、志願した覚えがあるという人は、全員受験させたということでありました。

大学として一番困ったのは、住居でありまして、先ほどの写真のように、住んでいるところはほとんど水没してしまいました。いろいろ状況を尋ねたんですが、家主とか、不動産屋が見つからないんですね。みんな避難していて、いないんです。住居が足りないということで、さまざまな悪あがきをしました。

法人の理事が考えてたんですけども、仙台の北、石巻の西に30kmぐらい行ったところの古川駅前ホテルを50室借り上げて、いざとなったら、朝食込みで、ひと月5万円で貸そうという手配までしました。最終的には、家主が帰ってきて、早めに掃除をしてくれて、なんとかできました。

ただ、こういうときに難しいのは、強引にやれば住居を確保はできるんですが、被災者だって住居はほしいんですね。体育館よりアパートに入りたいというのが人情でありまして、それを強引に押しのけるわけには、大学としてはいかんだろうということで、たとえば1部屋のところに、2人住んだらどうかとか、いろんなことをやりました。

交通はいまだに解決してない問題で、仙台と石

巻を結んでいる JR の仙石線は、今も不通です。27 年度に開通の予定です。震災の年の 5 月 19 日に石巻線が石巻まで開通しまして、仙台から小手田経由で石巻というルートができましたが、本来、1 時間ぐらいのところ、1 時間 40 分ぐらいかかります。本数も少ないです。

本学の学生、実は仙台圏の学生も結構多いんです。泣き言言っても仕方がないので、代替として通学支援バスを出しました。もともと不便ですから、スクールバスを運行しています。一番遠いのは、岩手県の北上から 2 時間かけて来ています。一関からも来ています。これは、自宅から大学に行けない地域があるというのは差別だということで始めたわけですが、これが保険のように効きまして、このバスの路線の諸君は、「下宿がない」と言っても、けろっとして、「いや、バスで行くからいいです」って言って、大丈夫でした。

ですが、それだけでは足りないのです、石巻と仙台の中間にある多賀城からのバスを新たにつくって、今は大型バスが 2 台で運行しています。

ちなみに震災の前は、バスの経費が 3,000 万ぐらいだったんですが、今は 8,500 万ですね。総収入は、今年度、16~17 億ですから、これは大きな割合なんです。

そんなこんなですから、授業は 5 月 20 日に始めて、21 日に入学式をやりました。ほかの大学は大体 4 月の中旬ぐらいに再開予定を新聞に載せてらしたんですね。うちの教員からは、うちもやらないとつぶれた思われるとか、叱られたのですが、決められないものは決められないです。一旦決めて変えるのは、非常にまずいわけですね。みんな都合はありますから。

だいぶ遅れて決めたんですが、5 月 20 日って決めた理由は簡単です。この日から、通学できるという保証は、ありませんでした。ですが、これより遅らせると、後期まで遅らせなきゃいけなかった。卒業式も動かしますから、新入社員研修までも影響してしまうんですね。だから、ここは「えいや」と決めてしまった。この辺は、学長が勝手に決めて、失敗したら叱られるという方式しかないです。幸いに 5 月 19 日に、JR 石巻線が開通し

ました。予測していたのではありません。

入学式をやるかどうか大きな議論がありました。「こういう時期に、お祝いをしていいのか」ということはありましたが、やはり学生諸君にとっては、めでたいことではあります。ということで、あえてやりました。学長の式辞はかなり工夫しましたけど、やってよかったと思います。

授業を、90 分から 75 分に短縮しました。そうじゃないと通えないんですね。来る時間が間に合わない、帰る時間が間に合わない人が増えた。一コマの時間を短縮して、回数を増やして、かけ算をすれば、同じ時間という理屈です。

それでよろしいかということ、厚生労働省とか、国土交通省に聞きました。「よろしい」と言ったところは、一つもありません。みんな黙ってました。高等教育局は、「時間を確保してください」と言っていましたけど、卑怯であります。

学生のケアは必要なのですが、私たちはアマチュアなんですね。心理の専門家は一人いたんですけども、でも臨床ではないということで、とにかく、基本的なスタンスは、向こうが話したかったら、どれだけでも聞こうと。それだけです。あえて、こちらからは働きかけはしないようにしました。いろんな安否確認をして、その時に学生が話したければ、何時間でも聞こうということです。

それから、親御さんの会、育友会に臨時の懇談会をしていただいて、これを東北地方 9 か所で開催しました。懇談会には普段の倍以上来てくれています。大学の現状の説明をし、いろんな相談があれば受けますという内容でした。

学生は、かなりの者が深刻なダメージを受けています。春休みで自宅へ帰っていたのですが、目の前で人が流されるのを見ている学生が、結構います。そのときに、僕の手があと 1m 長かったら助けられたかもしれないと思ってる学生が、結構いるんですね。罪悪感を背負いこんだのです。

もう一つは、遺体の確認をしています。家族が亡くなった、親族が亡くなった、18 歳以上ですから頼まれます。非常に辛い経験をしています。ひどい経験をしてるんですが、我々にとって難しいのは、誰がそういう経験をした学生なのかが、全

くわかりません。実は学位記授与をした、1m 80 ぐらいの背の高い男子学生ですが、バスケットボールをやっていました。東京の企業に就職が決まって、来週引っ越しますと話してくれました。よかったね、わははと笑いあいました。ふと気がついて、「ところで、ご家族は？」と聞くと、「父が亡くなりました」と答えました。彼は、捜索ではお父さんが見つからなくて、お姉さんと二人で自宅を掘り返して、自分で見つけたんですね。ものすごい後悔です。私は彼の体験を感じ取れませんでした。実に明るく、楽しく将来のことを伝えてくれたんですけども。そういう意味では、我々は、あくまでアマチュアなんだということを認識しました。

学費減免をやったんですけど、暮らしの手当まではできてなかったの、学外奨学金への応募を支援しました。これは、若い事務職員が頑張ってくれました。ラグビー部 OB です。実は学生諸君には、こういうのに応募したがない人が、たくさんいます。応募する気になれない。理由はよくわかりません。私も、実は罹災証明書の申請をするのに1か月半かかっています。

それはそれとして、食わないといけませんから、その若い職員が、対象になる学生一人ひとり呼び出して、「いいか」と座らせるんですね。「今、ここにこういう奨学金があるから、俺の言うとおりに書け」って言って、書かせたんです。個人情報とか、人権とか、いろいろあるんでしょうけど、書けないよりはいいだろうと。結果的に、申請した人は全員いただきました、6,000 万円あまりの奨学金が支給されました。今年もやってます。

震災後の展望について

一方で、震災直後に「やられっぱなしは面白くない」というので、地元の防災、復興に関することをやるという提案をしました。あとで「復興共生プロジェクト」という名前もつきました。詳しくは資料をご覧くださいと思います。

最初には言いましたけれども、地元の人と一緒に我々も立ち上がっていくという意味での共生、

共に生きるという気持ちをこめています。支援ではありません。我々も助けられる側です。

最終目的は教育の深化です。学生のお金でやります。国からもお金をもらってますけれども、大部分は学生のお金です。だから、学生諸君に何か返せなくてははいけない。

状況は、震災の直後には半日で変わりました。午前中、水がなくてヒーヒー言っていたのに、午後には水が20トン届いて、もう余ってる。そういう状況です。ですから、会議をやったら間に合いません。ですから、共創研究センター長。それから、大学開放センター長と私の3人で、大体は立ち話で相談をして、決めたらやる体制にしました。教授会には報告だけです。そういう仕組みにしました。

幸いに、そのプロジェクトに国のお金がつきました。5年で1億2,000万円です。産業の振興をやります。さまざまな情報発信もしています。

ということで、結構、うまくいって、23年度末に報告書も出しました。これは、これから数年間続けて出します。今年も出ましたけれども、もうちょっとで、オンラインで読んでいただけたと思います。この第1号は、本学のホームページからご覧いただけます。先ほども言いましたが、我々はモルモットですから、事実はずいとも含めて表へ出すことにしました。

共創研究センターでも、シンポジウムを24年の3月にやりました。石巻と女川の行政の責任者に来てもらって、議論をしていただきました。

国からもらったお金で、本学らしいことをいくつかやりました。水産加工業の支援や新しい仕事の開発なんていうことをやってます。あるいは、被災企業の缶詰をブランドとしレシピはそのまま、八戸の会社に代わりにつくってもらうなんていうのもやりました。

それから、津波に強い自動車のつくり方、使い方の研究を始めました。プリウスをつくったエンジニアが本学にいます。多賀城で、自分の乗った車が流されまして、九死に一生を得ました。彼は、エンジニアとして、陸上での車の挙動について、ありとあらゆる解析をしたそうです。しかし水に

浮かんだときのことは何も考えてなかったそうです。技術者として悔しいのでなんとかさせてくれるというふうに言われたんですね。学内ですでに10台車を沈めるという実験をしました。あと、助かった人の聞き取りを100人以上しています。それを踏まえて、車に乗っていて、水につかっしまったときの対応グッズというのを開発して、そろそろ売り始めます。これは、地元の企業が作ります。

それから経営学部には、地元のシャッター通りをなんとかしようという、地域経営研究会がありました。それが急遽方向転換をして、地元の産業支援や住民支援に向かいつつあります。これは、あくまで教育の一環としてやっています。

地元の被災地域の三次元の模型をつくることもしました。これは、若い教員2人が大学に避難して、「私たちの育つてるとこは、昔はこうだったんだよ」って言えるようなものをつくりたいという話がまとまりました。情報処理の専門家と三次元設計の専門家が、これをつくっています。石巻市内とかで、現在公開していますが、東京に避難した人とか、みんな見に来てくれて、やってよかったなと思います。

研究方面でも先生方が活発になっていまして、外部研究資金の導入が大体10倍ぐらいになっています。これまで1,600万ぐらいしか入ってこなかったんですけども、今は、1億は超えていますね。

それから、いろんなところと協定を結んでいます。たとえば、石巻市との幻の協定も本当にしました。

石巻と、それから気仙沼の商工会議所、信用金庫と大学の5者で産業振興を中心とした協定を結んで、気仙沼にうちの教員が行って、産業振興にかなり力を出しています。

家政学会とも協定を結んでおりまして、かなり地道な調査研究をしています。これは10年計画です。調査の中で、ボランティア団体の歴史っていうものを書いてるところがないというのがわかりまして、ボランティア団体の聞き取り調査をやっています。これはかなりおもしろい内容です。今年度中に本を出します。

今年の4月から復興ボランティア講座というのを、前期毎週火曜4時50分～6時10分までやっています。これは完全に無料で公開しました。市民の人が20人ぐらい、毎回来ます。学生は160人ぐらいでしょうか。あと、ほかのNPOの人が毎回来るっていうのがおもしろいことなんですけども、これはUstreamで配信しています。リアルタイムと、それからこれまでのものと両方ありまして、ですから、毎週火曜日Ustreamにアクセスすると、この講義を聞けます。

今年の8月3日の午後に石巻専修大学でこれをまとめたシンポジウムをいたします。これも完全公開です。ぜひここにもおいで下さい。

また、文化活動の支援というのをやっております。石巻市内には会場がないんですね。文化センターも、文化会館も流れました。ですから、コンサート会場がなくて、本学の学生ホールの音響は意外にいいというのがわかって、コンサート会場になっています。

いろんな支援の方が来てくださるんですけど、今年の夏はドイツから2グループ。室内楽部、7月28日。8月にはジャズのコーラス、こちらもあります。

外国からの小・中・高校への支援が多くて、それをつなぐのも大学の役割だと思っています。大学はもともと国際的な機関で、外国に友だちもいっぱいいるし、語学もできます。外国から個別の支援をしたいという申し出がいっぱい来ました。ピンポイントで、どこどこの小学校に私たちは支援をする。そのような支援をしたいんだという希望です。でも、自治体は、それはできないんですね。自治体というのは、教育委員会で受け入れて、均等に割らなきゃいけない。それは仕方がないです。我々は、私学ですから、短期的には若干不公平でもいいと思ってるから、いろんなネットワークを使って、たとえば、1,000万円受け入れてくれる中学校っていうのを探しました。そうしたら度胸のある校長先生がいて、「俺、どうせあと1年だから」と言って、個人が領収書を書いて、支援を受け入れてくれる校長先生を見つけました。

もう一つは、情報の発信です。これはドイツのブラウンシュバイクという市の新聞です。本学もドイツから数千万円の支援をいただいていますけれども、お礼に行きました。そのときに取材を受けました。1年後には電子メールで取材を受けました。こういうことにこたえるのも、やはり大学の仕事だと思えます。

先ほど言いましたように、外部からの支援をつなぐあるいは外国から取材に来たときに、どこに行ったらいいのかを教えてあげる、そういうことをするのも我々の仕事なんだと思えます。

大学の隣に仮設住宅があるんです。ちょっと歩けば約1,200棟、最大の仮設団地があります。その皆ともつき合っています。大学に来ていただいて、お花見をしていただいて、おしるこを振る舞うということもしました。

あるいは、全日本ロードレース選手権のチームが子どもたちに自転車教室をやるのにも場所と人を貸す。このように、ありとあらゆることをやるのが、この大学なのかなと思っています。

震災の直後に私が何を考えたかということですが、できることはできる、できないことはできないとわかりました。札幌からすぐに石巻に入れるわけじゃないんですね。実は「強引に帰ろうか」って言ったら、「来るな、無駄だから」って事務部長から言われたんですけども。無駄なんですね。そこで、いい格好しないのは、大事だと思えました。

もう一つは、うろたえないことなんです。あわてないことです。わざとゆっくり行動しました。現地にいる教職員は死に物狂いで、全力出してくれました。そのとき考えたのは、そういう人はいっぱいいるだろう。私は別の役割をしなくてはいけません。ですから、私は全力を出さないようにしています。全力を出さないで、のんびり関わるということですね。やはりいい格好をすると非常に危険です。それこそ、たとえば大学の再開は何日からにするか。早くやるっていうのは、格好良いんですけども、できないものはできない。

学長という立場にある者が倒れるというのは許されないと思えます。私に倒れる自由はありません。ゆっくり体の調子が悪くなるというのは勘弁

してほしいんですけども。全力を出しちゃいけないんですね。歯を食いしばらない。肩間にしわを寄せない。これは、かなり意識しました。じゃないと、長持ちはしません。

先ほど、白川先生からもご紹介いただきました。10年というのは、最低10年ということですよ。阪神淡路でひとまず落ち着くのに10年かかっているわけですから、あれだけの災害があったあと10年では落ち着かないというのは思っています。それなのにトップが倒れるというのは、これはもう犯罪に近い。したがって、全力を出さないで、セーブしながらずっとやっていくことを重視しています。

私たちの大学というのは、撤退する場所がありません。石巻からは逃げません。そういう意味では、格好いいことを始めて、「やっぱりやめます」というのは、ありえないわけです。ですから、10年、20年続けられることを、細々とやっていくというのが、我々のスタンスです。ですから、首都圏とか、関西圏の大学がやっているほど格好いいことはできない。それは、もう仕方がないということで、ぼちぼちとやっていくというのが、我々の毎日の暮らしであります。どうぞご静聴ありがとうございました。

司会：坂田先生、ご自分の体験に基づいた貴重なお話ありがとうございました。では、ここでもうしばらく時間がございますので、会場からのご質問をお受けしたいと思います。ご質問のある方は挙手をお願いいたします。どうぞよろしくお願いたします。

会場1：先生、今、最後にこの東日本大震災の体験っていうのは、格好いいことはできない。トップは倒れてはいけません。大変感激いたしました。30年前にこの仙台でソーシャルワークを勉強しました。3.11の起きた時間帯、地震が起きた。私の部屋のテレビをつけた。そうすると、津波がザーッと仙台空港を覆っていく。飛行機が流されていく。大変なことだと思う。

当時、全国社会福祉協議会の全国社会就労センター協議会、通称 SELP と、障害者の就労支援の協議会の役員をしている身だったので、阪神淡路

大震災の、神戸の役員のところ、3月12日、翌日午後、名古屋以西の会長が名古屋の人だったので、名古屋以降の役員が集まって、翌日に東日本大震災の復興支援といえますか、とにかく緊急対策本部をつくりました。まず、岡山県の社会医療施策議会で、3月20日に全会員に呼びかけて、私の法人の体育館に物資を、ダンボール箱を100個集めまして、若干流通がよくなったので、宅急便で、佐川急便をチャーターいたしました。チャーターするのに4日かかりまして、3月25日の午後2時に、いわきナンバーのドライバーの方がいらっちゃって、100箱つんで、私も被災してるんです。でも、この物資を運ぶのが使命だと。そして、翌日の3月30日の12時に、仙台ワークキャンパスに到着。そして、たしか3月14日か15日に白川先生と連絡が取れて、安否が確認できた。

そういう経過があって、私の法人の職員がそのセンターへ、日本障害フォーラムを通して、約200人が支援に入りました。精神障害の方を通院に連れていくのに2時間かけて行く。そして、その方が時計を買いたい。決まんないんですね、不安定で、それをずっと待って、1日かけてお薬をもらいに。

また、私の人生の先輩は、資源循環型、エコロジーの仕事をやっていた。岡山県の津山市から、自分のとこのマイクロバスで20時間をかけて石巻に入って、焼肉。また、B-1グルメで有名になった津山ホルモンうどんっていうものを焼いた。その社協が、とにかく行って見て、びっくりした。何も先を考えることができない。皆さんがそこにいらっちゃった。愕然とした。とにかく、冷凍にした肉を焼いて、ホルモンうどんを食べてもらった。1週間ほどやってたんですが、帰るときにその自治会長さんらしき人が、紙もなかったようで、新聞の広告の裏に鉛筆で、その社協に「会長さん、ありがとうございます」とお書きになって、私の知り合いの社協にお渡しされた。

普通はインタビューを、とにかくお話を聞くという姿勢でいらっちゃった。そのお話を聞く姿勢の基本というか、先生のお考え。これはソーシャルワークの基本に関係するのか。なんかありましたが、インタビューの基本的な哲学を教えてください。よろしくお願いします。

坂田：インタビューですが、要するにそれしかできないという、ありていの話です。でも、見ると、話をし終わるとだいぶ表情が和らぐというのは事実です。

もう一つは、これは、実は学生さんだけではなくて、親御さんにもやっていました。亡くなった学生さんの追悼式をやって、そのあと、親御さんが来てくださって、一緒に食事をしたんですが、そうしたら、仙台で亡くなった学生のお父さんが話をしだして、2時間聞きました。お父さんが人にその息子の話をしたのは、震災以来はじめてだとお母さんがおっしゃいました。聞きはじめて1時間ぐらいで、これはひょっとして聴くことが功德かもしれない思い出しました。被災者の皆さんの中で暮らしていて、息子が亡くなった話ではできなかったのです。

家政学会の協力で、仮設住宅料理教室をやりました。それを続けていて住民の人たちとやってお友だちになれたんです。おばあちゃんとか、おじいちゃんが話し出すんですね。ようやく話が出てきたんですけども、それを聞くっていうのは、やっぱりこれから大事な仕事かなと思います。ただ、これは、我々はあくまでアマチュアだという立場ですから、専門的にどうこうという裏づけは全くありません。

司会：ありがとうございます。ほかにご質問がある方はいらっしゃいますでしょうか。それでは、お時間も迫ってまいりましたので、最後に拍手でもって基調講演を終了させていただきたいと思えます。坂田先生、ありがとうございます。